

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当: 斎藤登美夫

Digitized by srujanika@gmail.com

◆◆◆ No.0564 ◆◆◆

19/12/18

## 【 注目材料などから来年の相場見通しを考える 】

「来年の話をすると鬼が笑う」——というが、今年も残り 2 週間を切った。したがって、そろそろそんな格言も効果が薄れつつあるだろう。そこで今回の当レターでは、「材料」を中心に日柄や経験則などを含め、現段階での来年の見通しについて考えてみたい。また来年になり改めてレポートする予定だが、取り敢えず第一報、速報版としてお読みいただければと思う。

<< 材料: 政治ファクター >>

10月30日付の当レターなど、過去に何度もレポートしたように、今年一年の金融市場を振り返った場合、「各国政治要因に振り回された」と言って間違いない。その典型は、EU離脱をめぐる英国情勢だが、対中を中心に全方位への対立構造を示したトランプ米大統領の貿易対応なども波乱要因として、相場が右往左往したことは記憶に新しい。

そんな「各国政治ファクター」だが、今年2019年の流れを継ぎ、来2020年も相場のメインイシュー、波乱要因になる公算が大きいと思われる。

現段階で判断しているなか、最初のヤマ場と目されている政治ファクターは「英國情勢」だ。先日の総選舉に勝利したジョンソン英首相が「必ず離脱する」と強く宣言したEUからの離脱期限が、2020年1月末。年明け星々から、ポンドや欧州が様々な思惑により、荒っぽい変動をたどる危険性を孕んでいる。

一方、それ以外で 2020 年、とくに注目されているのは秋に実施される見込みの「米大統領選」。与野党とも候補者の絞り込みさえ出来ていない段階だが、発表されている幾つかの米世論調査を見てみると、トランプ氏の再選は黄信号が灯っていると言えるかもしれない。いわゆる「ウクライナ疑惑」を受け、3 人目の弾劾不可避とされることが支持率の低下に繋がるなど、かなりの足かせとなっている感を否めない。

現状において不利な立場に置かれている特朗普氏が米大統領選への再選に向けた方策、起死回生の一手として、対中はもちろん、日本や韓国、EUなどに対して、貿易面を中心に軍事面（米軍駐留費の増額や装備品の購入増）などで圧力を強めることは決して荒唐無稽なことではないだろう。こちらについても、一年を通し、為替など金融市場の不安要因のひとつとして寄与する可能性がある。

それ以外では、来年4月に韓国総選挙が実施され、相場云々ももちろんのこと、過去最悪まで冷え込んでいる日韓関係に与える影響に要注意。なお、現在の文政権から別の政権へと交代することも、決してありえないことではない。

また、任期を1年以上残しているとはいっても、日本の衆院選が来年中に実施されるとの見方も有力視されている。ちなみに、どこまでが本音なのかどうか定かでないものの、野党・立憲民主党の枝野代表は11月15日の講演で「来年1月下旬から2月という一番寒い時期に、選挙になる可能性がだいぶ出てきた」と指摘したことにより、12月13日にも「現職の衆院議員の任期は折り返した。安倍首相が『桜問題』の審議から逃げるための解散があってもおかしくない」と述べていた。個人的には、来年はオリンピックイヤーでしかも日本はホスト国。それからすると、政権交代リスクもある年明けなど早いタイミングでの解散・総選挙の公算は低いと考えるが、それでもオリンピックとパラリンピック終了後ならば、そのときの世情をにらみつつ可能性は否定出来ない気がしている。

＜＜ テクニカルと経験則 ＞＞

先週もレポートしたように、今年のドル/円相場は変動幅、変動率ともに過去稀にみる「歴史的小変動」で幕を閉じることになった。詳細はバックナンバーを参考にしていただきたいが、ともかく、すでに 2017 年以降 3 年連続で小動き（「年間変動率」がいずれも 10% 以下）になることがほぼ確定していることもあり、来 2020 年は正真正銘の「正念場」となる。そのため捲土重来、これまでの反動とも言えるような巻き返しを期待する声も少なくない。

しかしながら、前述した来年のビッグイベントのひとつ、「米大統領実施年」の為替変動を調べてみたところ、1990年以降で「平均年間変動幅(16-17%)」を明確に上回ったのは2008年だけ(22.2%)。それを除く

と、おおむね 13-14% 程度の変動にとどまるケースが多く観測されていた。

もっとも、仮に過去の米大統領選実施年に多く見られた13-14%の変動を達成したとすれば、今年や昨年よりも活発な動意をたどった計算になり、こうした意味では「ドル/円の動意は復調傾向」と言えなくもない。いったいどう捉えればよいのか悩ましいところだが、ともかく来年も過去の平均変動率を大きく上回るような「大相場」を迎える可能性は残念ながら低いようだ。

なお、株式市場を中心に指摘されることの多い、相場格言からみた「干支と相場の関係性について」だが、来年の干支は「子(ね=ねずみ)」で、子だくさんの意味合いもあってか、「繁栄」とされている。ご承知のとおり、NYダウなど米株は年末近いこの時期にきて史上最高値を更新するなど、堅調な値動きをたどっているものの、先の話からすると、来年はさらなる上昇が期待できるのかもしれない。

そして、仮に米株高が来年も続くとすれば、為替市場においてもドル高傾向が継続するという展開が見込まれるのだが、果たして実際のところは如何に!?(了)

当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご判断いただけますようお願いいたします。本稿の「販売者情報」をご確認ください。

ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の**無断転載・転送**もご遠  
ね。本稿に関する問い合わせは『ENZA』、スケル『までお願い致します。

---



Copyright (C) fx-newsletter limited company All Rights Reserved

---

